

海外研修ハワイ・セミナーについて

正 田 義 彰

学習院男子高等科では希望者を対象とする海外での英語研修を、49年度から夏休みを利用して米国ハワイ州のオアフ島で毎年続けていますが、過去4回の参加者は合計163名に達し、ユニークな学校行事として注目されています。57名という多数の学生が参加した今夏（52年度）は、後述のごとく組織を改めて内容を画期的に充実させたことによって、そのプログラムはほぼ確立したといえを段階に達したので、これを機会にこのセミナーの概要を御紹介したいと思います。

学習院は「ひろい視野」をそなえた人材の育成を教育目標のひとつに掲げており、伝統的に語学教育に力を注ぐと共に、学生の海外留学を奨励便宜を計ってきました。しかしグルー基金、アメリカン・フィールド・サーヴィス、ロータリー・クラブ幹旋のオーストラリアとの交換学生など、高校生に対する公的な留学制度は非常に門戸が狭く、それらを利用できる学生は極めて少数です。他方、誰でも自由に参加できる一般の海外研修プログラムに個人的に参加することは、高校生の年齢を考えると父母ばかりでなく学生自身にも不安があり、学校として積極的に勧めることは躊躇されます。

そこで私達は、できるだけ多くの学生が安心して参加できるような海外研修のプログラムを学校行事として実現したいと願っていました。そこへJTBを介してELS（English Language Services — 移

民教育の経験にもとづく効果的な指導法で定評のある米国の機関)の東京支部の責任者を紹介され、交渉の結果、我が校の学生だけを対象とするセミナーがハワイに特設されることになりました。こうして、我が校独自のプログラムに発展させることを念頭に置きながら、49年の夏、「学習院ハワイ・セミナー」を発足させた次第です。

ELSに英語の研修を委託したセミナーは49年度から51年度までの3回、次の三つを主要な目的として実施しました。無論、その第一は「聞き取り、話す」ことに重点を置いた英語の集中的訓練であり、15名程度の小クラスで毎週日の午前中4時間、米本土からELSが派遣したディレクターを中心に現地採用のアメリカ人教師が担当しました。総時数が平素の週2時間の授業の1年分以上に相当する訓練の効果は、参加者の意欲や既得の語学力によって必ずしも一様ではありませんが、何事にも英語を必要とする環境での実地訓練の効果と相俟って、特に「聞き取る」能力の向上において著しいものがあります。

目的の第二は、「国際的な視野と生活態度」を学ぶことです。会話の能力は国内でも熱意と時間と費用を注げばかなりの程度まで身につけることが可能ですが、国際性を体得するには、泳ぎを覚えるには先ず水に入るように、海外の異質の世界にとび込んで、そこに生きる人びとと親しく交るのが最も効果的です。この点において、太平洋をめぐる各地から様々な人種・国籍の人びとが集まっているハワイは、研修の場として理想的だと言えます。これは私達が当初から滞在地としているハワイ・ロア・カレッジについても言えることで、前学長のロウ氏の“*To be here is to be international.*”という言葉の通りだと思います。その学生たちは実に友好的であり、彼等の相互間にも私達に対して

も人種的偏見などは全く見られません。彼等の生活態度に接し、積極的に彼等と交わることによって、セミナーの参加者は多くを学ぶことができますし、思い出に残る温い友情を経験した者も少なくありません。

このセミナーは、自主的な生活態度の養成という点でも顕著な効果があり、私達はこれを第三の目的と考えています。これは、大多数の参加者にとってこのように長く家庭を離れるのが初めての体験であることにもよりますが、ハワイ・ロア・カレッジの学生寮の生活様式に負うところが大きいと思います。この寮はホテル並の設備をそなえた美しい建物で、各室のプライバシーが完全に保たれる構造になっています。つまり、そこでの生活は各人が時間を守ることを前提としており、それを怠ると食事その他のサービスを受けられないという意味で、自主性の必要を痛感させられるのです。3～4週間の滞在は大して長い期間ではありませんが、自主的な生活態度が習慣化するに十分な長さであり、参加者の父母からも「見違えるようになって帰って来た」という感想を寄せられています。また、一箇所に滞在して規則正しく生活することは、目まぐるしい観光旅行とは異なり、「外国で生活したのだ」という実感を与えてくれます。多感な青年期におけるこの種の経験は、必ずしも即効的ではありませんが、その後の生活に様々な面で好ましい影響を及ぼすものであることを、これまでの参加者の例から私達は確信しています。

次に組織を改めて新発足させた52年度の第4回セミナーについて説明します。第3回まで利用したELSは同種の機関の中では優れたものであり、その指導法からは私達も学ぶところが多く、そのスタッフの引受けた仕事に対する熱意と責任感はいまことに敬服すべきものでした。し

かし、ELSはハワイに常設のセンターを持たないため本土から派遣されるディレクターが毎年異なり、前年度の経験を十分に活かさない憾がありました。また、そのディレクターがハワイではいわば“stranger”であるため、現地での教師の採用や、ホーム・ステイその他の課外活動の手配について若干の不便がありました。そこで、これらの問題を解決するために、ハワイの土地に根をおろした組織を作ろうと決意した次第です。

幸いに私達にはセミナー発足当時から知遇を得た現地の方々が沢山あり、特に教育界の方々には当初から助言や協力を仰いでいました。そこで51年度夏の滞在中に私達の決意をその方々に伝えたところ、前ハワイ州教育局長ティミー・ヒラタ氏、教育局のプログラム・スペシャリストのジーン・シダ夫人、ハワイ・ロア・カレッジのケイコ・グレン夫人などから積極的な協力の申し出があり、その後多数の文通と52年春の現地での打合わせを経て、次のような新しいプログラムを組むことができました。

先ず、私達の学生を受入れる現地の組織としてヒラタ氏をディレクターとするHLI (Hawaii Language Institute) を設立し、州知事顧問のアルバート・ミヤサト博士、ハワイ大学教授でTeaching English to Speakers of Other Languages (TESOL)の権威ルース・クライムズ博士、それにシダ夫人ほか5名の教育局の現職者をコンサルタントに迎えました。これによって優秀な教師の確保と、課外活動における様々な便宜が約束されたわけです。実際、昨年度と殆ど同じ参加費の中で、57名の学生に対して6名の教師と2名のカウンセラーの採用、マウイ島の1泊旅行、3回の遠足、ホーム・ステイ、様々

な課外活動を行なえたのは、これらの方々の“ non-profit ”を鉄則とする御協力のお蔭でした。

プログラムの主な目標は次の4項目としました。

1. 英語を聞き取り、話す訓練
2. 英語を実地に練習する機会の提供
3. 学生をハワイとそこに住む人々に親しませること
4. 国際的な理解と親善の促進

これらの4目標を達成するためにプログラムの内容を次の4部門に分け、各々について可能なかぎり綿密な準備をしました。

1. 授業部門
2. 課外活動部門
3. 遠足・旅行部門
4. ホームステイ部門

滞在地に関しては、現地の関係者には若干の異論もありましたが、従来通りハワイ・ロア・カレッジのキャンパスを利用することに決めました。それはオアフ島を東西に貫く雄大なコオアラウ山脈の北側の山麓に位置し、カメハメア大王の古戦場として名高いヌウアヌ峠を仰ぎ見る景勝の地にあります。ホノルルまでバスで約30分かかり、歩いて行ける距離に海水浴場がないという点はやや不便ですが、約20万坪の敷地に僅か200名のために作られたその施設は、環境も諸設備も研修の場として理想的だと言えます。6棟ある学生寮は3階建の各棟に30名が宿泊できますが、2人部屋が5室ずつある各階の広さは約50坪あり、快適な生活を送ることができます。また、49年以来連続して利用したこと、それに過去の参加者のマナーが良かったことにより、この学園全体に私達を歓迎する気持が強いことも、ここを滞在地に選んだ理由であります。

セミナーの日程は、7月23日に出発して8月14日帰国（現地滞在は3週間）としました。できれば少なくとも4週間は滞在したいのですが、各クラブの合宿や9月1日から始まる2年生の学校行事などの制約のため現状ではこれが限度です。この限られた期間の中で効果をあげるべく、前述の各部門について下記のように充実を計りました。

先ず授業部門では、57名の参加者を18～20名の3グループに分け、3名の教師と3名の助教師が担当しました。授業は午前8時に始め、最初の約1時間は全学生を1室に集めて、ハワイ語、ハワイの歴史と地理、課外活動や見学・遠足・旅行の案内、生活上の諸注意などを、必要に応じてスライドを利用しながら行ないました。「聞き取る」能力の増進のために説明はすべて英語で行ない、日本語による補足は最小限にとどめました。その後でA、B、Cの3グループに分れた学生は、教室を次々に移動して3種類の授業を受けましたが、教師1名と助教師1名が1組になって担当した各授業の内容は次の通りです。

(1)発音とヴォキャブラリに重点を置く授業——これはTESOLの専門家であるウィリアム・フレーザー氏とその夫人の担当で、アメリカ・インディアンを引くフレーザー氏による適確で精力的な訓練は、ユーモラスな夫人による個人指導とは相俟って、その効果は参加者から最も高い評価を受けました。この夫妻は教室での授業以外に、例えば彼等の趣味であるシュノーケルを利用しての水泳に希望者を案内するなど、課外活動の面でも積極的に働いてくれました。

(2)表現力に重点を置く授業——ドラマとスピーチの専門家で、1968～75年の在日中に多方面で日本人に対する英語の指導の経験を積んだ

ドン・ボウムズ氏と、公立学校で我国の現代国語に相当する英語の授業（特に発音とスピーチ）を教えているキャンディス・フジイ夫人が担当し、この授業はほとんど各グループを二分して行なわれました。テーマを与えて物語りを作らせること、歌の練習、早口言葉など様々な方法を駆使しての訓練は、とかく引込み思案になりがちな学生達に間違いを恐れず話させるのに最も効果があったようです。また、ボウムズ氏は希望者を連れてパイナップル工場へ案内し、フジイ夫人は2年生全員を自宅に招いて地元の高校生との交歓の機会を与えるなど、この2人も課外活動に尽力してくれました。

(3)英語の基本的文型の徹底——「聞き取り、話す」能力の基礎には正確な文法・文型の知識が不可欠であるという考えから設けたのがこのクラスです。テキストには、TESL (Teaching English as a Second Language) の教材として定評のあるR.J. Dixon の Modern American English の第2巻(全6巻)を利用しました。これは読物として見る限りでは例文も設問も我が国の中学から高校初級程度のテキストで、学生達も最初は物足りない顔をしていましたが、間もなく、どんなに易しい文でも「聞き取り、話す」のは容易でないことを痛感させられたようです。

担当した教師はウィリアム・カニンガム氏と助手のジャネット・マッゴーフ嬢でした。前者は東部出身で哲学と神学を専攻、ニューヨークで数年間聖職を勤めた後、約10年前から現地の公立学校で主として移民の子女に英語を教えている温厚誠実な人物です。後者は牧師を父、看護婦を母として同じく東部に生まれ、今年ハワイ・ロア・カレッジを卒業した若い女性で、49年の第一回セミナー以来私達のために様々な面

で尽してくれた稀に見る奉仕の精神の持主であり、その人柄を見込んで私が特に助教師に推薦したものです。この両者が参加した学生達から返事を書くのに忙殺されるほど多くの手紙を受取っていることは、彼等がその人柄に深い感銘を受けたことを示しています。

これは他の4人の教師と課外活動を指導した2人のカウンセラーについても同様であり、それぞれ個性的な優れたアメリカ人に親しく接したことは、参加者にとって最大の収穫だったと思われます。

3週間で合計60時間、57名の学生を6名の教師が担当した授業を毎日参観して痛感したのは、語学の訓練は集中的であるべきこと、同時に最大限15名程度の小クラスで行なうのが望ましいということでした。今回は各グループを二分した場合には8～10名のクラスになり、特に発音の訓練に効果がありましたが、この方式は今後も維持したいと思います。

次は自由参加の課外活動ですが、この部門は州教育局の職員でカウンセリングの専門家であるリリアン・クルーズ夫人と、現在ハワイ・ロア・カレッジで中国語および中国と日本の歴史を教えているウィリアム・ザネラ氏が担当し、他のスタッフも協力するかたちで行ないました。正真正銘のハワイアンであるクルーズ夫人は、ウクレレ、男性用フラダンス、レイの作り方の講習、ハワイ料理の紹介（キャンパス内で穴を掘り、実際に豚の丸焼を作り、その夜ルアウ——ハワイ風の宴会——を開きました）などによってハワイの風俗習慣の紹介に努めると共に、見学や買物の相談相手になることによって参加者に親しまれました。ザネラ氏は午後から夜にかけて参加者の生活全般の世話役を勤めてくれましたが、

この人なしではセミナーの円滑な運営は不可能だったと思われるほど、氏の働きに負うところが大きかったです。ホノルルの史蹟やハワイ大学の案内、マウイ島の旅の付添、病人や怪我人の世話、学生寮での連夜の個人指導などを通してその深い学識と誠実な人柄に接したことは、参加者にとって実に貴重な体験であったと思います。また、意欲的にこれらの課外活動に参加した学生は、英会話の実地練習の機会を予想以上に多く持つことができましたが、これはカウンセラーやその他のスタッフが地元の人びとであることが最大の要因でした。

遠足・旅行部門について。遠足は毎週水曜日に予定し、(1)ビショップ博物館見学、(2)カフク砂糖工場見学、(3)シー・ライフ・パーク見学とハナウマ湾での水泳と、全員参加で3回実施しましたが、予めパンフレットやスライドで説明した上で、できるだけ多くのスタッフが同行することによって、これらが単なる行楽でなく勉強の機会にもなるように計画しました。

旅行は1回、マウイ島への一泊旅行を行ないました。この地を選んだのは、有名な休火山ハレアカラ（標高3,000メートル余、東西15Km南北4Kmの噴火口を持つ）、美しい溪谷、ハワイの古都でかつて捕鯨基地として栄えたラハイナの町、静かな海岸など、ハワイの歴史と自然を知るのに最適と考えたからです。あくまで学校行事であるという立場から、冷房装置のないスクールバスを利用し（第1日目だけ）、説明は全て英語で行なったため、一部の学生に不満がありましたが、約80%の学生からは好評を得ました。経費は航空運賃、バス代、ホテル代、食費など全てで60ドルで、一般の業者による日帰りの旅行が120ドルで

あることを考えると、ここにも現地のスタッフの並々ならぬ好意と努力が窺えました。

ホーム・ステイは参加した学生達に最も高く評価された部門です。外国と外国人を知るためにも、外国語の実地練習のためにも、ホーム・ステイは最も効果的ですが、安心して学生を託せる適当な受入れ家庭（ホスト・ファミリー）を用意するのは容易なことではありません。今夏57名の全参加者にその機会を提供できたのは、かねて私達が知遇を得たハワイ・ロア・カレッジのケイコ・グレン夫人の献身的な御尽力に依るものでした。夫人の父君は慶応義塾の第1回の卒業生で現地の西本願寺の確立の功労者（父君の名を冠したホール、その功績を顕彰する銅像があります）であり、御夫君は軍人として戦後17年間も在日した方で、私達のセミナーの意義を理解して、この骨の折れる仕事を引受けて下さいました。受入れ側の家庭からは宗教上の問題などについて厳しい注文もあり、29軒のホスト・ファミリーとの交渉に多大の時間と労力を注いで下さったグレン夫人には、御礼を申し上げる言葉もないくらいです。

7月30日（土）から31日（日）にかけてホスト・ファミリーに招かれた学生達は、それぞれ貴重な体験と思い出を得て帰って来ました。夢のような歓待を受けた者もあれば、期待よりも遙かに質素な生活に面喰った者もありましたが、アメリカ人のありのままの生活に接し得たという点で、後者の方が多くを学んだように思われます。ホスト・ファミリーの中にはその後も学生達を招いて下さる家が多く、中には授業の参観に見えたり、真剣に養子に迎えたいと申し出る方さえありました。

アメリカの習慣に従って1週間以内に礼状を出したこと（封筒、便箋

を与えて書式を指導)も、最後の夜ホスト・ファミリーを招いてアロハ(さよなら)パーティを開き名残りを惜しんだことも、学生達にはよい思い出になったに違いありません。また、招いて下さった方々から、「おかげで日本人をよりよく知ることができた」と感謝され、ホーム・ステイの意義の大きいことを痛感しました。

学生達が得た様々な経験の中で、州知事ジョージ・アリヨン氏との会見は特に感銘深いものだったと思います。ディレクターの平田氏や私の知人を通してこのセミナーにかねてから関心を寄せていた知事は、多忙の中を特に時間を割いて州議事堂に私達を招き、国際親善の意義とその必要性について語り、いくつかの質問に答えてくれました。私の知る限りではこれは異例のことであり、その好意に感謝すると共に、このセミナーをさらに充実発展させねばならないと心を決めた次第です。

次は、このセミナーに対する参加者の評価(無記名のアンケートの集計)です。

| 項 目 | 評 点 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 1.2.3の占める割合 (%) |
|-----|------------|----------|----------|-------------|-------------|--------|--------------------|
| | | 非常に 良 | かなり 良 | ふつう (良い) | や 不 満 | 不 満 | |
| A | 英語の勉強 | 13人 | 25 | 16 | 2 | 1 | 94.7 |
| B | ドミトリーの生活全般 | 14 | 24 | 16 | 2 | 1 | 94.7 |
| | (ドミトリーの設備) | 13 | 25 | 11 | 5 | 3 | 85.9 |
| | (ドミトリーの食事) | 11 | 17 | 19 | 9 | 1 | 82.5 |
| C | ホーム・ステイ | 25 | 19 | 9 | 4 | 0 | 93.0 |
| D | 課外活動(選択) | 17 | 11 | 15 | 10 | 4 | 75.4 |
| E | 遠足と見学 | 9 | 18 | 15 | 8 | 7 | 73.7 |
| F | マウイ島への旅 | 9 | 15 | 20 | 6 | 7 | 77.2 |

この表の示すように、主要な項目である英語の授業、ドミトリーの生活、およびホーム・ステイについて、90%以上の参加者が普通以上と評価しており、個人的な好みによって評価が左右される他の項目についても、平均約75%の参加者が同じ評価を与えています。また、不満の主な原因は、学校行事であるために門限（原則として夕食時まで）などの規律が厳しかったこと、それと同時に盛り沢山の行事のために学生達のいわゆる自由時間が少なかったこともありました。しかし総合的に見て、いくつかの点で改善の余地はありますが、新方式による第4回セミナーは期待以上の成果をおさめ、ここに学校行事として確立したと言える段階に達したと思います。

これまで4回のセミナーの全部に付添い、約15週間をハワイで過ごしたことによって、私自身も学ぶところが多く、いろいろと興味深い体験をしました。それについては又の機会に御紹介することにして、最後に現地のスタッフから寄せられた手紙の中から、このセミナーの意義を明らかにしていると思われる言葉を引用して、この稿を終りたいと思います。

I was quite surprised at the many letters I have received from your students. It will take me a while to answer all of them, but I do hope to reply to each one. Mr. Shoda, I think I have never before had a group of students that showed so much courtesy, respect, and gratitude as your Gakushuin students. I admired their willingness to work, including homework both for my class and for Gakushuin, even while they were

on vacation. I wish we had more students here like that!

You may be interested to know that in three weeks I covered as many English lessons with your students as it would normally take three or more months with my students in Hawaii. I hope they will continue their good progress in English at Gakushuin. One thing that would help them, since they are not now in an English speaking country, is if they have periods when they would practice speaking English to each other, perhaps in English class.

I believe the behavior and friendliness of your Gakushuin students made them good ambassadors of their country. For example, during World war II many Filipinos received some negative impressions of Japanese because of the cruelties of war in their country, but my wife was able to experience and see through your students a very different and good impression of the Japanese people.

(Mr. William H. Cunningham)

There is no need to thank me, I loved every moment I spent with you and your boys. I truly hope that some of them will be able to visit Hawaii again some day. So far I have received six letters. It is

good to know they have not forgotten me yet.

Whether the boys know it or not, the trip you engineered gave them an experience not many of their counrymen will ever have. For this I will thank you for them. (Mrs. Candyce Fujii)